ジャン・ジュネ
泥棒日記、１９４９

わたしは一九一〇年の十二月十九日にパリで生れた。貧民救助局の世話になっていた孤児、その被後見人だったので、わたしには、自分の戸籍に関してこれ以上の知識を得ることは不可能だった。二十一歳になって、初めて自分の出生証書の写しを見ることができた。母はギャブリエル・ジュネという名だった。父についてはいっさい不明。そしてわたしがこの世に生れ出たのはアサス街二十二番地だということがわかった。

「これでおれの出生について何か知ることができるぞ」と思って、わたしはアサス街に行ってみた。二十二番地というのは公立慈恵産婦院だった。そして、質問にはいっさい応じられない、と断わられた。わたしはモルヴァン高原地方の農家に送られて育てられたのだ。わたしはいまでも曠野を歩いていて——特に黄昏どき、そして昔ジル・ド・レー*が住んでいたティーフォージュ城の廃墟を訪れた帰り途に——えにしだの花に出会うとき、それらの花に対して深い共感の情を覚える。わたしは愛情をこめて、それらをしみじみと眺める。そして、わたしの心の乱れは、わたしを取巻く全自然に要請されているように感じられる。わたしはこの世で一人ぼっちなのだ、が、それでいてわたしには、自分がこの花の王、ひょっとしたらその精でないと言いきることもできないのだ。えにしだの花たちは、わたしのお通りに敬意を表し、会釈はしなくても、わたしだということはわかっていて、身を屈める。花たちはわたしが彼女たちの唯一の代表者だということ、自由に、敏捷に動き回る、風に打勝つ代表者だということを知っているのだ。えにしだの花は自然界におけるわたしの標章なのだ。そう、わたしはじつにそれらを通してこのフランスの土地に根を下ろしているのだ、ジル・ド・レーの手にかかって串刺しにされ、殺戮され、火刑にされた子供や青年たちの粉々の骨で肥えた、このフランスの土地に……。

＊訳注　Gilles de Rais (1404～1440) 二十五歳で元帥に任ぜられ、ジャンヌ・ダルクらと共に英国駆逐戦を戦ったが、間もなくこの居城にひきこもり、限りない欲望の充足を求めて魔術を信奉するに至って数百人の人命をその犠牲にしたといわれ、処刑された。

セヴェンヌ地方に多いこの棘だらけの植物を通して、わたしはさらにヴァシェの罪悪に満ちた冒険にも参与する。そして、わたしがその名称を自分の名としているこの灌木を通じて、植物界全体がわたしには近しい存在となっている。わたしはすべての花を憐れむことなく眺めることができる。どれも皆わたしの縁類なのだ。もし、わたしが花々を通してさらに下等の領域に達しようとすれば――わたしはまさに木性羊歯やそれが繁茂する沼沢地へ、そして藻の類へ降りたいと思う――わたしはますますもって人間たちの世界から遠ざかることになる。**

人々の言うところによれば、天王星では大気がじつに重いので、羊歯類は地面を伝って延びる纏繞形態をとり、動物は各種のガス体の重みに圧しつけられて、辛うじて身を引きずっているらしい。この絶えず這いつくばっている屈辱の生きものたちの中に、わたしは入り混りたいと思う。もし転生によって自分の棲む世界を自由に変えることが許されるのなら、わたしはこの呪われた遊星を選び、わたしと同じ種族の徒刑囚たちと一緒にそこへ行って暮すだろう。醜怪きわまる爬虫類に取巻かれ、植物の葉は黒く、沼の水はどろどろして冷たい、その暗闇の中で、わたしは果てしのない惨めな死の生存を続けるのだ。わたしには睡眠は決して与えられないだろう。ところが不幸どころか、わたしはますます曇りない意識をもって、優しく微笑むアリゲーターたちのけがらわしい同胞愛にとり巻かれているだろう。

＊原注　ジャン・コクトーはわたしに初めて会ったその日に、わたしのことを「我がスペイン種の小馬」とよんだ。彼はこの国がわたしにどんな影響を与えたかということについては何も知らなかったのだが。

＊＊原注　植物学者のあいだでは、えにしだの一変種に有翼えにしだとよばれるものが知られている。